

## B29 墜落す



アドバイザー 小林元

太平洋戦争の戦局はだんだんきびしくなり、若い男子は戦場に送られ多数の戦死者も出ました。食料は不足し物資も乏しくなって人々の生活はますます苦しくなりましたが、昭和十九年の十二月には、ついに米軍機による大空襲が始まりました。まっ先にねらわれたのは矢田大幸町にある三菱発動機工場でした。ここは当時の日本の航空機用エンジンの大部分を生産していた関係上、最初はそんなに大きな工場ではなかったのですが、戦局の進展とともに拡張が続き、ついに西は矢田町から東は猪子石の西部まで、鍋屋上野の台地と矢田川にはさまれた地域の大部分を占有する大工場になっていました。数度の大爆撃によって工場は壊滅し、工場の周辺は蜂の巣のように爆弾の穴があき、それた爆弾は猪子石はもとより、藤森や森孝新田にも落ちて多数の犠牲者が出ました。

名古屋市内の主な軍事拠点を破壊してしまうと、米軍は焼夷弾による夜間爆撃を開始しました。これは一般民家をねらった無差別爆撃で、とくに昭和二十年の三月十二日、十九日、二十五日の三回の夜間空襲により、名古屋市内は焼野原になりました。三月二十五日早暁の空襲は、B29爆撃機百三十機によって名古屋市の東部が主な目標にされました。この夜米軍機は照明弾をまじえて爆弾二千六百五十発、焼夷弾三万二千三百発を投下したため、死傷者およそ二千八百名、家屋の焼失破壊



壊滅した三菱発動機工場(昭和22年当時)

四千九百戸、被災者は二万八千名を超えました。

空襲もたけなわのころ、上空で一機のB29がメラメラと炎を出すと同時に、機体が傾き始めました。一瞬かん声をあげた長久手方面の人々も、機体が大きな火の玉となって東方に向かって落ちて来るのを見てあわて、ふためきました。大音響とともにその火の玉は、現在地下鉄藤が丘車庫の東北端にあたる丸山池のほとりに墜落しました。夜明けとともに近在の人々が大挙して集まって来ました。長湫の人々によって墜落機の残がいの中から七名の米兵の遺体が収容されました。当時は極端に物資が不足していたため棺を作る板もなくて、やむなくわらのこもで遺体を包んで、長湫字野田農にある墓地の一隅に葬りました。戦後進駐して来た米軍がその遺体を掘って持ち去りましたが、もし当時長湫の人々が遺体を粗末に扱っていたら、戦争犯罪人として裁かれたかも知れません。

『香流川物語―長久手・猪子石の今昔―』より